

ハート

～ハンセン病、島を追われ、島とともに～

吉田怜愛

私は久米島に生まれ育った。沖縄の、さらに離島の、何もない島だ。外に出ると、耳の裏からチリチリと焼けこげていく感覚がする。町を歩くと棘のように刺す太陽、毒々しいほど赤い花、壊れた楽器のような蝉の音が、幾重にもなって容赦なく降り注ぐ。この地のものはすべて派手で明るくて、ちょっとやそっとのことでは動じないふてぶてしさを備えている。



図 1 久米島・登那覇から島全体を臨む

そんな久米島から遠く離れた名護の地、ハンセン病患者の国立療養所・沖縄愛楽園という施設で説明ボランティアを行っている一人の男性がいる。久米島出身、元ハンセン病患者の平良仁雄（たいらじんゆう）さんである。ハンセン病とはらい菌による感染力の弱い感染症であり、主に皮膚や末梢神経が侵され後遺症が残ることもある。感染者は体の一部が変形することから、昔から偏見や差別の対象にされていた。さらに明治から昭和 20 年代までは患者を強制的に収容し、療養所から一生出られなくする「ハンセン病絶滅政策」が行われた。海からの強い風に吹かれながら、平良さんは「(ハンセン病隔離施設は) 入り口はあるけど出口がなかった」と呟いた。9 歳の時ハンセン病に感染した平良さんは、笠をかぶせられ、逃げるように島を追われた。それ以来、平良さんの居場所は愛楽園だ。悪いことをしたわけでもないのに、ハンセン病という病気への間違った認識により、平良さんはすべてを奪われてしまった。「社会の偏見や差別、それがあったため、私は古里に

帰ることができなかった。」平良さんは故郷久米島でハンセン病についての講演会をした際にこう語っている。



図 2 愛楽園にて説明をする平良仁雄さん

平良さんが自らハンセン病患者であったことをカミングアウトしたのは10年前だ。ハンセン病を隠して生きている人が多い中、平良さんがハンセン病を公言することにしたきっかけはHIV患者の子供たちの温かい心に触れたからだと語る。平良さんは末梢神経を傷つけられ上手く動かない手を、力強く振り上げ胸をドンッと叩く。「ハートだ。」ハンセン病は勉強してわかるものではない、ハートで受け止めるものだ。平良さんはハンセン病を学びたいと愛楽園を訪れる人々に、自分の経験をハートで伝えるために説明ボランティアを続けている。



図 3 愛楽園からは綺麗な海が見える

平良さんはハンセン病患者が苦しむことになったのはらい予防法があったからだと何度も語られた。らい予防法は、ハンセン病患者を価値のない人間だとし結婚や選挙権などの人権までも奪った。平良さんは自分を島から追い出した久米島の人ではなく、追い出さざるを得ない状況を作り出した法を恨んだ。そしてこれまで久米島を恨んでいたことに対して島の人々に謝罪した。平良さんの謝罪は私の「ハート」に届いた。久米島の人が差別を行ったのは事実であろう。しかし、現世代の人々を糾弾することは、反発やさらなる恨みを生み出すことにつながる。勿論各人に責任はあるが、心を溶かすのは差別を受けた方々からの「許し」と考える。それは、ひとりひとりが自分の中にある差別に気づかせ、体制や法を批判するだけでなくどう自分が変わるかを考えていくための力になる。



図 4 平良仁雄さんの愛した、久米島・畳石

この地がその華やかな見た目とは似ても似つかないような、悲惨な歴史をその奥底に抱えていることは知っていた。その被害者としての姿の裏に、また、加害者としての姿があることを、平良さんはその身をもって教えてくれた。

私は久米島に生まれ育った。人は内気で、海は穏やか、山は島の中心にどっしり構えている。そんな慣れ親しんだ島の景色が今日はいつもと違って見えた。久米島は何も変わっていない、変わったのは私自身の目だ。この島では差別があった。今でも差別は終わっていない。「頭で受け止めるんじゃない、ハート、ハートだ。」平良さんの力強い声と胸を叩くドンッという音が思い出される。「ハート」。必要なのはただそれだけだ。

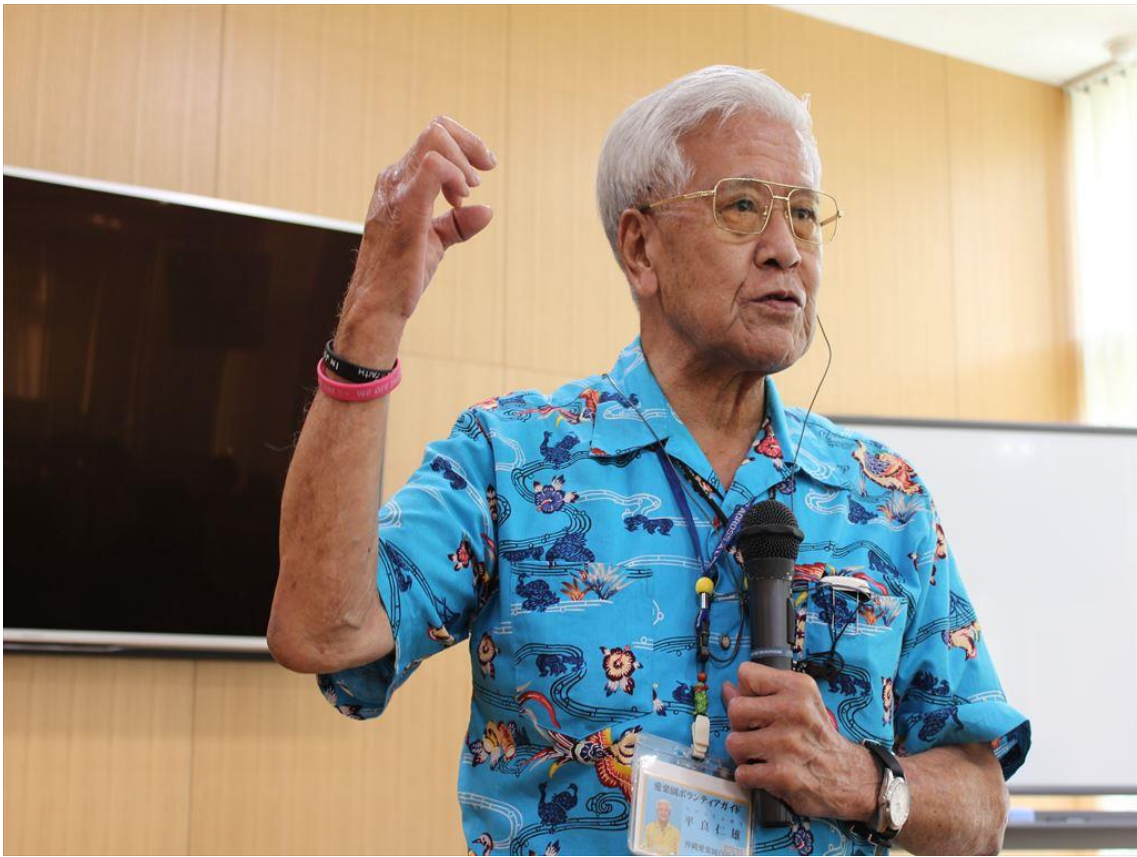


図 5 「ハート」を強調する平良仁雄さん